

北海道中南部のスズメ個体群は大量死から回復したか？
Population trends of Tree Sparrows in south-central Hokkaido after the crash of 2006.

○黒沢令子¹・大平羊吾² (1. バードリサーチ研究員、2. 個人)
Kurosawa, R (Bird Research), & O-hira, Y.

北海道中央部で2006年初冬に起きたスズメの大量死と激減は社会的にも注目を浴びた。その後、死亡したスズメ個体の多くからサルモネラ菌が検出されてきており、大量死の原因として感染症が関与した証拠が積み上がってきた。こうした状況下で、北海道のスズメ個体群が今後とりうる主な傾向として低迷、さらなる減少、増加という3つのシナリオが考えられる。スズメは日本の全国的にも減少傾向という報告があり、英国でもスズメは1980年代に激減した後、多くの農地の鳥と同様に回復していない。

今回は、2006年より始めたスズメモニタリングの7年目の経過を報告する。2008年の発表後、調査定点の数は大いに減少してしまっただが、調査が継続できている地点のデータは重要な情報である。そこで、欠落データにも対応できる統計手法であるTRIMを用いて、北海道道央の札幌市と道南の室蘭市における調査結果を解析した。

調査方法は市民参加型の簡易モニタリング法である(1)「スズメ定点調査」と(2)バードリサーチの「ベランダバードウォッチ」を利用した。調査は、(1)では5分間を毎月10回、(2)では15分間を毎月3回行う。そのうち、月ごとの最大値を用いて、繁殖期と越冬期にまとめて検討した。両者はやや異なる方法をとっているため、解析はそれぞれ別に行った。その結果、繁殖期においては、増減が見られるもののいずれの方法でも増加傾向がみられた。一方、越冬期については、信頼性の高い結果を得ることができなかった。信頼性の高い解析結果を得るためには、地点数の確保が必要だが、市民参加型の長期モニタリングにおいて大きな課題である。

このことから、道央一道南のスズメは2006年の減少後、年による変動を経ながらもおおむね回復傾向を辿っていると思われる。しかし、サルモネラ菌が当該地域に常在する以上は、2006年のような天候不順や、生息環境の改変などの影響が予想を越える負の影響を及ぼす可能性があるため、注意深く見守る必要がある。